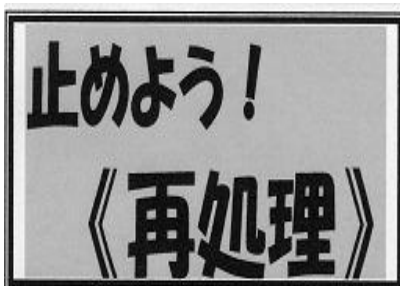


三陸の海を放射能から守る
岩手の会（略称）三陸の海・岩手の会
郵便振替 02240-5-102650
ホームページ《再処理 / 岩手の環境》
<http://sanriku.my.coocan.jp/>
《本紙の全バックナンバー掲載》



《天恵の海》
2023(令和 5年)
6月 7日
第245号
編集事務局 S.Oshida
TEL・FAX 019-623-1636

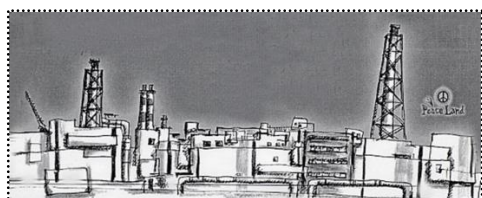
日本海溝巨大地震 六ヶ所再処理工場質問主意書と国会質疑（上）

中央防災会議の警告

「新知見：公共施設は 震度6強以上の耐震を！」

国の答弁 「再審査必要なし」！

「工場は、関係法令で独自に審査されている」



六ヶ所再処理工場の耐震設計基準地震動

1993年の起工当初、耐震性を
375ガルで設計し建設されその後
2007年に450ガル、
2014年に600ガル、
2018年に700ガルと訂正され
現在に至っている。

「震度6強とは830～1500ガルの
加速度の揺れ」

国土交通省：国土技術政策総合研究所
「観測情報使用にあたって」

内閣府中央防災会議は二〇二〇年四月二一日、日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震の対策について「概容報告」を発表し、昨年三月二二日に「最終報告書」を公表しました。内容は再処理工場のある六ヶ所村で、海溝地震時に震度六強（830～1500ガル）が想定されるとするものでした。六ヶ所再処理工場の設計基準地震動は現在700ガルで、耐震性が低すぎます。にもかかわらず原子力規制委員会は二〇二一年七月に突然に「再処理工場の安全審査」を終了し、合格を決定しました。

この間脱原発政策実現全国ネットワークに結集する多くの市民団体による院内集会や関係省庁担当者との折衝が行われました。

これらの集会でクロスアッパされた「再処理工場は震度六強の地震に耐えられるのか？」の重大問題について山崎誠衆議院議員（立憲民主）が三回にわたって国への質疑討論や質問主意書の提出を行いました。

山崎誠衆議院議員の 質問主意書

山崎議員は昨年八月三日、再処理工場が震度六強の大地震の襲来に備え、厳重かつ公正な耐震安全審査を行い、情報公開し、近隣自治体住民の理解を得ることを求めるなど三件の内容の質問主意書を国へ提出し八月一五日政府答弁書を得ました。

岸田総理大臣名の 政府答弁書

しかし、国（原子力+規制委員会）は大地震の襲来への対応について答えず、「最新の科学的・技術的知見を踏まえて適切に策定された基準地震動であることを確認し、二〇二一年七月二九日に同申請を許可した。立地自治体等関係者へ丁寧な説明に努めているところである。」とする答弁内容でした。私たちの憂慮する震度六強の質問に答えず、同じ日本政府の内閣府防災会議の警告を無視するものでした。常に安全側に

立つべき原子力規制委員会の役割放棄とも言えます。

私達の学習会から

その一
Aさん そもそも二〇一一年三・一一大震災はマグニチュード九・〇だったのですね。
Bさん そうです。気象庁が最終的に九・〇の数値を出し、その点では各界とも異論がないようです。
Cさん 三・一一は宮城・福島沖合でしたが、今度はそのより北の方の、エネルギーが放出されていないところになりそうですね。
Dさん その地震について今回内閣府はエネルギーが一・四倍のマグニチュード九・一を予測したのです。
Eさん 一・四倍も違うと言われると心配になります。東日本大震災と同程度かそれよりも大きな、日本海溝巨大地震がありうるということですね。

第1図 日本海溝地震モデルと日本原燃検討用地震の比較表

第430回審査会合 資料1 2 : 38ページ

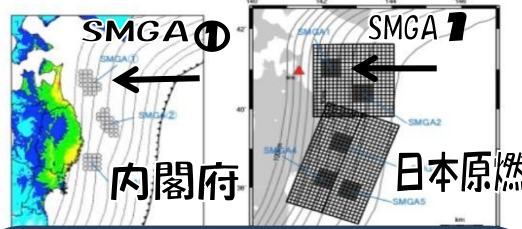
内閣府 日本原燃
9.1 9.0

山崎誠議員 衆議院経産委員会での質疑
「山崎議員は審判官の一言で、しかし再処理工場の耐震に問題なし」

山中規制委員長E長答弁

山崎議員は二〇二二年一月二日の衆議院経産委員会の質疑で「内閣府防災会議報告書は、日本海溝巨大地震の想定モーメントマグニチュード（以下Mw）を9.1と想定したが、日本原燃は9.0としている。この二つの想定値は、地震エネルギーで一・四倍異なるが、この地震に再処理工場は耐えられるのか」と質問しました。山中伸介原子力規制委員長は「耐えられる」と答弁しました。

山中伸介原子力規制委員長は一・四倍違うことを認めつつ、二〇二二年二月四日の第四三〇回審査会合において「内閣府の検討会の概要報告の内容が、既許可の地震動評価結果に影響がないことを改めて確認しており、「一・四倍の揺れに耐えます」と答弁しました。



敷地に近いSMGAの諸元		内閣府(2020) SMGA①	検討用地震 SMGA1
地震モーメント	Nm	1.8E+21	2.0E+21
面積	Km ²	2746.6	2500
応力降下量	MPa	30.0	34.5
短周期レベル	Nm/s ²	1.70E+20	1.86E+20

右表の「検討用地震SMGA1」が日本原燃の示した数値である。この表の「応力降下量」と「短周期レベル」の数値から、日本原燃は、六ヶ所工場は「マグニチュード9.1の海底地震に耐えられる」と結論したとする。内閣府は「地震モーメント」が大切と言っている。

注:応力降下量とは 地震断層に蓄えられた力が地震によってどれだけ解放されるのかの数値。数値が大きくなると地震の規模は大きい。
注:短周期レベルは 地震波についての数値で、地震の伝わり方の判断で重要。

- 内閣府のMw:9.1の放出地震エネルギーである地震モーメントMoは $5.62 \times 10^{22} \text{Nm}$ です。日本原燃Mw:9.0の地震モーメントMoは $3.98 \times 10^{22} \text{Nm}$ です。1.4倍大きいのです。
- 日本原燃は地震全体の放出エネルギーのごく一部分のSMGA1と内閣府SMGA①で比較し基準地震動は問題なしとし、規制委員会も認めました。内閣府のSMGA①のMoは表から $1.8 \times 10^{21} \text{Nm}$ (Mw8.1)であり全放出エネルギーの3.2%です。日本原燃のSMGA1のMoは表から $2.0 \times 10^{21} \text{Nm}$ (Mw8.13)であり全放出エネルギーの5.0%です。
- しかも、この表のMo値の算出方法は内閣府と異なる方式（女川原発のSMGA値と同じ）により出されたものであり、比較する意味がありません。

注:SMGA: Strong Motion Generation Area 強震動生成域 特に強い地震を発生させる領域。

注:Nm (ニュートンメートル): モーメント (偶力) 又は仕事の大きさを表す力学単位

日本原燃の比較は誤り！
委員長答弁の根拠は非科学的！

山中規制委員長は再処理工場がMw9.1の地震に耐ええるかと判断したのは第四三〇回審査会合と答えました。
図1がその際の日本原燃の判断の根拠資料です。

異なる算出方法で得た値の比較は無意味

先ず第一に図1の表のパラメータを、内閣府は二〇一一東日本大震災の情報に、日本原燃は一九八七宮城県沖地震の情報により各々異なる方法で算出しています。異なる方法で得たパラメータを比較しても意味がありません。

地震全領域の一部SMGAを比較し判断出来るか？

第二に、日本原燃は発生する全地震エネルギーの一部であるSMGA1のみのデータ（パラメータ）を求め、内閣府SMGA①についてパラメータを算出比

較し「基準地震動評価（七〇〇ガル）への影響はなし」と評価しています。SMGAを見ると日本原燃は五つ、内閣府は三つになっています。内閣府は日本原燃のSMGA4と5は二〇一一地震でエネルギーを放出したとして除いているのです。全地震エネルギーの数%の地震生成域だけのパラメータを比較して優劣を決めることは疑問です。

不都合なデータは公開しないのか？

第三に、全領域からの地震エネルギーにより六ヶ所村の震度について内閣府は震度6強と明らかにしています。日本原燃は明らかにしていません。不都合なデータは公開しないのでしょうか、疑問です。詳細を検討した報告は本会のホームページのURLをご覧ください。

<http://sanriku.my.cocean.jp/230511JNFrtrick.pdf> 『日本海溝巨大地震内閣府評価に対する日本原燃評価のごまかし。』

(次号に続く)